

□ 計画背景

建築というものを考えていくと最終的に内部と外部という二つの空間に大きく分けられる。そしてこの内部と外部をさらに考えていくと、内部は建築としての使われ方。つまりや図書館であれば閲覧スペースといったような目的空間であると考えられる。つまり、目的地である。そして一方、外部はその建築の周辺の外部環境として、つまり都市の風景と変換できるのではないかと考えた。しかし、現在都市に建てられる建築を見ると内部と外部の関係は断絶しており、魅力的な建築は少ない。しかし、街を歩いていて都市に表情を与え、魅力として感じる広場や路地は、内部と外部の間にもう一つのつながりの空間が存在しているように感じる。建築を魅力的なものにするため、「つながりの空間」をテーマに絞り、研究、設計していこうと考えた。

□ 計画敷地

東京都新宿区歌舞伎町1丁目19-1 敷地面積 5600㎡ 建蔽率 80% 容積率 900%

「都心の中の廃墟」となった新宿コマ劇場跡

計画敷地は、2008年の暮れに閉館になった新宿コマ劇場が建っている場所である。

現在は、テナントの立ち退きなどの問題によって再開発が中断し、現在も取り壊しが始められないといった場所である。再開発後の計画では、今まであった劇場などのアミューズメントの施設は一切なく、「オフィス・ホテル・物販・飲食の複合ビル」という大枠のイメージだけが決まっており、計画は滞ったままで、現在高密度化する都市の中に遊休地となっている場所である。地域住民は歌舞伎町の発展を支えてきたコマ劇場や新宿東宝劇場の持っていた劇場などのプログラムを取り入れた計画をして欲しいという要望書を出しているのが現状である。しかし、この敷地に900%という高密度な複合ビルが本当に必要なのだろうか。歌舞伎町という大衆文化を発信し続けている場所にもっとふさわしい計画ができるのではないかと考えた。人々が集まり、文化を発信するような空白をこの新宿歌舞伎町という敷地に提案ができるのではないかと考えた。

都市計画家・石川栄耀の実現した「日本の広場」

計画敷地となり新宿コマ劇場前広場という広場が存在する。この広場は、歌舞伎町の全身である角筈一丁目東京大空襲あたり一面焼け野原となり、当時の町会長をしていた鈴木喜兵衛が終戦直後にこの地区を「道義の繁華街」を作ろうと町会の戦災者に糾合し、自主的な復興活動を立ち上げ、復興計画を策定するため、当時の東京都の都市計画課長であった石川栄耀とともに復興計画を検討し、「広場を中心とした芸能施設を集める、そして新東京の最健全な家庭センターにする」という案をまとめた。またこの歌舞伎町の復興計画には都市計画家である石川の日本の広場のあり方の思考が詰まったものであり、「景観の封閉」という手法を使ってこの歌舞伎町は設計されている。石川が重視していた広場は、駅前広場のような交通のための広場ではなく、人と人のつながりをうながすような社会交歓のための広場である。石川の言葉を借りれば、「景観の封閉とは、視野がどの方向に対しても盛り場外に開放されてることなき様、街景が構成されていることである。これは日本の庭園の重要な技巧でもあるのだが、隣保感上、欠くことのできないものなのである。」としている。石川は、盛り場の中に広場を作ることそれ自体が、広場空間を計画する上で重要な手法だと位置づけており、中でも石川が重要だと指摘していたのは、Terminal Vista（端景）の構成である。新宿歌舞伎町を改めて見てみると確かにT字路が多いことがわかる。



都市の魅力である路地や広場



1935-1937 区画整理前



当初の計画案



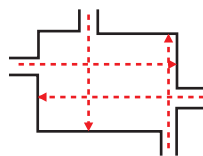
1955-1960 区画整理後



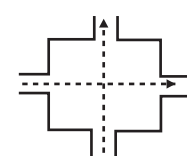
実際の区画整理変更図

新宿歌舞伎町の現状と閑散とした広場

新宿コマ劇場の閉館にともない、新宿歌舞伎町は大きな分岐点に立たされている。駅周辺に大型のシネマコンプレックスが建てられ、コマ劇場周辺の映画館も次々と閉館へと追いやられ、かつての大衆文化を支えた面影はもはやなく、近くにあるラブホテルや、風俗店などによってあまりいいイメージをもっていないのが現状である。この現状を踏まえ、歌舞伎町という町がもつ大衆文化を発信するような魅力を取り戻し、広場にも活力をもたらすような施設を計画する。



Terminal Vista を形成



Terminal Vista を形成せず



設立当時のコマ劇場前広場

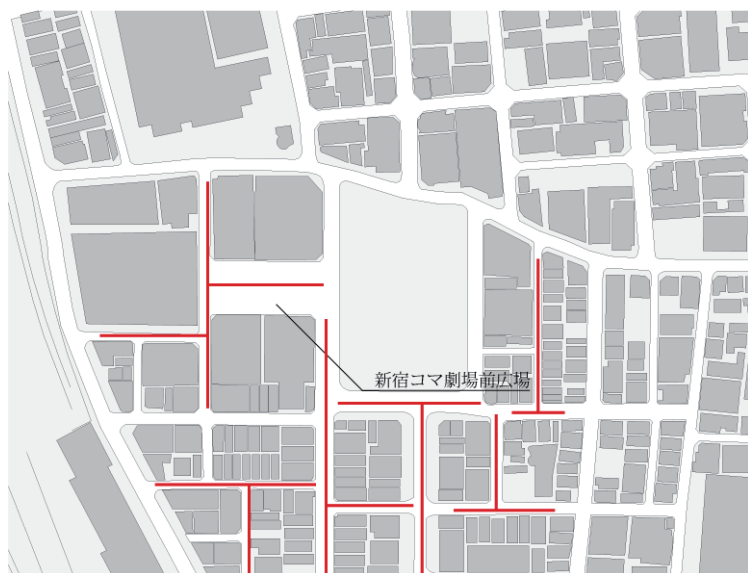


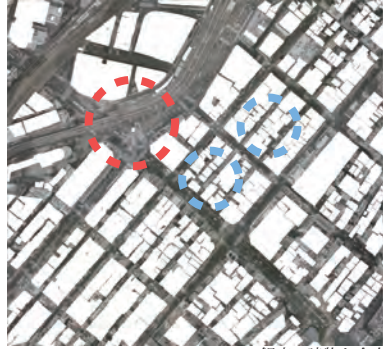
図 Terminal Vista の構成方法

「敷地の余白」としての生まれる都市のつながりの空間

路地であれば、住戸と街との間に、庇などによって作られたもう一つの自分たちの領域のような外部空間が存在しています。広場であれば、建物によって囲まれる事によって空間が形成され、領域を獲得し、内部の空間が外部へと広がってきています。では、この都市を魅力的に彩る空間構成はどのようにして形成されているのか。それはすべて敷地という土台に対して建築が建てられることによって生まれる余白によって形成されていると考えました。実際に渋谷と銀座の街で色分けをしてみると、スクランブル交差点の広場のような空間は囲まれた大きな余白が、宇田川町や松涛や銀座の路地などの小さな余白が存在しているのがわかります。この都市の余白として生まれる外部なのだけれど内部のように感じさせる空間を建築の内部と外部の間の緩衝剤のような空間として用いる事で新たな建築の提案ができるのではないかと考えた。この中間領域のような空間である都市の余白として生まれる空間を建築の構成の一部に組み込む事で内部と外部の関係に新しいものができるのではないかと考えた。



渋谷の建物と余白



銀座の建物と余白

○ 広場のような大きな余白
○ 路地のような小さな余白

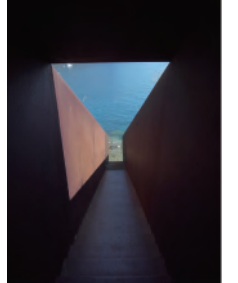
ベンヤミンのパスージュ論と建築

現代彫刻家ダニ・カラヴァンがオマージュを作ったヴァルター・ベンヤミンのパスージュ論の中でパリの風景などについて事細かに書いています。パスージュとは「移行」であって「街路」であって「通過点」であり、また境界をまたぐことである。またベンヤミンはこの本の中で「パスージュは外側のない家か廊下である、夢のように」と述べている。ベンヤミンは、「個人にとって外的であるようなかなり多くのものが、集団にとっては内的なものである」ということに関心をもっていた。つまり個人の内部性と集団の外部性ではなく、個人の外部性と集団の内部性、ということである。ベンヤミンには都市が抽出と引用を待つ世界模型に見え、書物も都市もそれを「外側から内側に向かって集約されたもの」と見るか、それとも「内側が外側に押し出されたもの」と見るかによって、その相貌が異なってくる。この本を松岡正剛が評論している文章を引用すれば「パスージュとは最初に書いておいたように、通過することである。通過とは、茶碗でいうならろくろで成型をして窯に入れ、これを引きずり出すことである。読書でいうなら書物を店頭から持ち出してページを開くことである。むろんそれらの行為にはあらゆる意図がからみあうが、その行為はいずれ終わる。終わってどうなるかといえば、それはどこかに配列されて布置される。それが都市というものであり、社会というものなのである。」

つまり建築で言えば、コンサートを聴きに行くのであれば、服を選び、家を出て、街を歩き、建物に入り、ホールのドアを開けることである。つながりの空間がいかに魅力的なものにできるかということである。このつながりという意味はただ単に内部空間だけのことではなく、都市とのつながりを考える事になるのである。これこそ建築のあるべき、そして考えるべきことではないだろうか。

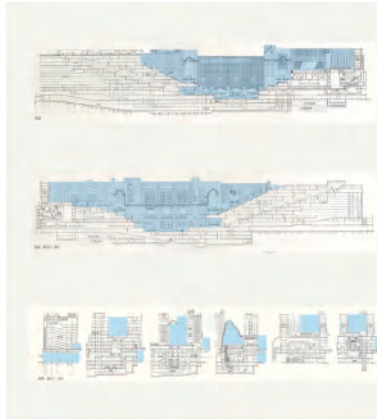
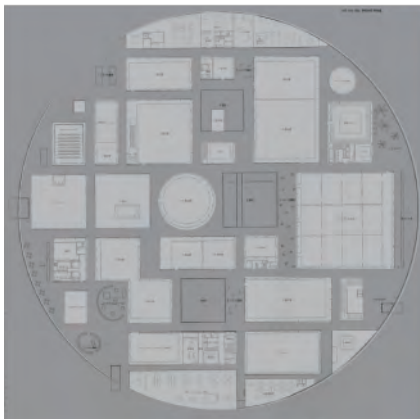


ヴァルター・ベンヤミン
「パスージュ論 4巻」



ダニ・カラヴァン
「ベンヤミンのパスージュへのオマージュ」

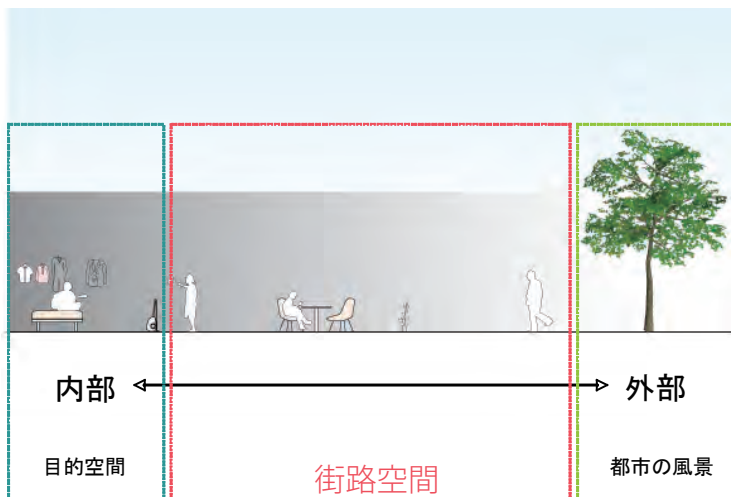
「目的の余白」としての生まれる建築のつながりの空間



建築の内部にも余白は存在する。SANAA 設計の金沢 21 世紀美術館を色分けしてみると黒い部分は余白の空間で構成されている。この空間は大きい休憩スペースであったり、細いただの廊下であったり、さまざまなアクティビティが場所によって違う。また原広司設計の JR 京都駅は同じ余白であるが、断面的に作られており、段上になることで舞台性が生まれ、劇場のような空間を構成している。このように建築に目的空間の他の部分での水平的な広場性や垂直方向の劇場性を用いる事で建築の中に、内部なんだけれど外部や外部なんだけれど内部といった不思議な空間を作り出す事ができ、近代建築の内部空間に対する思想から、内部に外部を取り込む事で近代建築を超える、現代建築のあり方のようなものが、そこから見てくる。実際、そのような観点からさまざまな建築を研究すると、横文彦氏のグループフォームや、原広司氏の有孔体や集落の教えなどに見られる文献や考え方も、建築同士の距離や高低差などの関係などもつながりの空間に対するものだとして理解する事ができる。



建築における内部と外部の関係

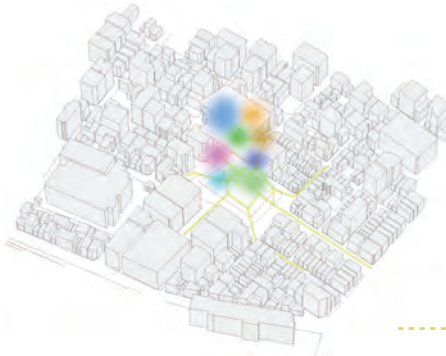


- 内部 (interior) : 内の、内部の、内側の、内面
→ 目的の空間 (閲覧スペース、寝室 etc...)
- 外部 (exterior) : 外の、外部の、外側の
(演劇などの) 屋外風景、外景
→ 都市の風景

建築というものを考えていくと最終的に内部と外部という二つの空間に大きく分けられる。そしてこの内部と外部をさらに考えていくと、内部は建築としての使われ方。つまり図書館であれば閲覧スペースといったような目的空間であると考えられる。つまり、目的地である。そして一方、外部はその建築の周辺の外部環境として、つまり都市の風景と変換できるのではないかと考えた。しかし、現在の高層建築などを見ていると内部と外部の境界は隔絶しており、魅力的ではない。しかし、一方で街を歩いていて魅力として感じる広場や路地は、内部と外部の間にもう一つのつながりの空間が存在しているように感じ、このつながりの空間をテーマに絞り、研究、設計していこうと考えた。

街で感じる空間を建築の内部と外部の中間領域として用いる事で、街の街路と融合し都市に届け込んでいくような建築、また外部なんだけれど囲まれて内部のような空間や、内部のだけれど、通りに面して外部にいるような空間など、さまざまな場の形成ができ、いろんなアクティビティを誘発する事ができるのではないだろうか。まるで、都市を歩いているような建築ができないうか。

→ 内部空間 (目的空間) + 外部空間 (都市の風景) + 街路空間



街路空間を立体的に配置し、街路空間に沿って機能を配置していく。
まるで建築の敷地が立体的に存在しているかのようなようである。
まさに街と一体化する公共建築である。

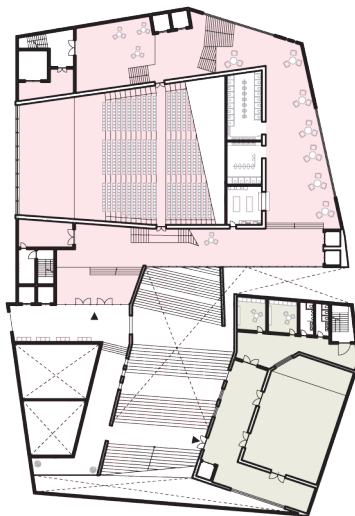
----- 街路空間



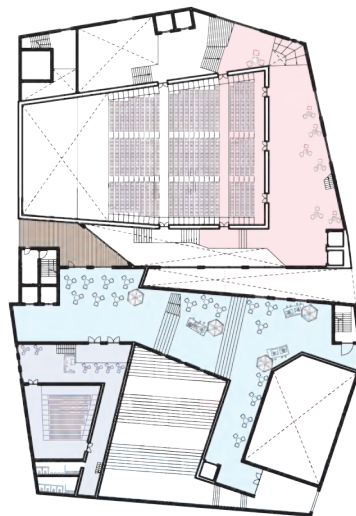
GLレベル PLAN 1/800



+4.0 plan



+8.0 plan



+12.0 plan

建築と余白の関係



+4.0 level



+8.0 level



+12.0 level



立体的に街路空間を構成する事によって、各レベルによって外部空間の入り込み方が違い、さまざまな空間が建築の内部、そして都市に対して作り出されていく。



